

# 6つの志向を踏まえて、 学びの動機づけをいかに図るか

事例の3校が様々な工夫している取り組みは、どのように学習意欲を喚起しているのか。東京大学の市川伸一名誉教授に、自身が提唱する「学習動機の2要因モデル」を基に、各校の活動と学習意欲のつながりを分析してもらった。さらに、学習意欲を高める方策として、「習得」と「探究」のサイクルを取り入れた授業づくりについて聞いた。

東京大学名誉教授、東京都・私立帝京大学中学校・高校 校長

市川伸一

## 学習動機のタイプ分け

### 大学生調査から、学習動機を6つの志向に構造化

私が学習動機に着目したきっかけは、東京工業大学に勤めていた1989年に、地域の小・中学生や高校生を対象に行った学習相談室でした。子どもから学習の悩みを聞くうちに、子どもが自律的に学ぶようになるためには、分らないところをその都度教えるだけでなく、その子がどのように学習して

いるのかに焦点をあてて学習改善を図るべきだと考えるようになりました。さらに、学習方略は「自分は何のために学ぶのか」といった学習動機と関係しているのではないかと考え、学習動機や学習意欲の向上の要因についての調査を、大学1年生を対象として自由記述方式で実施しました。その結果を分類し、構造化したものが「学習動機の2要因モデル」です(図1)。

図1の中の①③は、学習内容そのものを重視する学習動機で、「内容関係が浅い学習動機であり、」内容分離

動機」と呼んでいます。④関係志向 友人と一緒にだと楽しい、先生が好きだから頑張れるなど、その人がいるから学びに参加する。

いしかわ・しんいち 文学博士。専門は教育心理学。認知心理学を基盤にした個別学習支援や授業づくりなどの実践研究に取り組む。長年、中央教育審議会教育課程部会の委員を務め、学習指導要領改訂に携わってきた。帝京大学先端総合研究機構次世代教育研究部門特任教授などを兼任。著書に、『これからの学力と学習支援 心理学から見た学び』(左右社)、『授業からの学校改革』(図書文化社)、『勉強法が変わる本 心理学からのアドバイス』(岩波ジュニア新書)など多数。



# 学習意欲の向上

— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする

績がよいなど、競争心やプライドから成る動機。

**⑥報酬志向** 成績が上がったらお小遣いをもらえるなど、報酬が目あての動機。「先生から褒められたい」といった社会的報酬も含まれる。

## 6つの志向の関連

### 報酬が目あてでも

### 学びの入り口としては有効

「内容関与動機」が高い子どもは、結果として「内容分離動機」の子どもに比べてよい成績を上げる傾向があります。学習内容を身につけようと自分で学習方略を工夫するので、学習の質が高くなるからです。

先生方は、生徒が「内容関与動機」で学べるように指導していると思います。その教科・科目が好きだから一生懸命勉強して教師になり、生徒も同じように**①充実志向**で学んでほしいと考え、教科・科目の魅力を伝える工夫をしていることと思われます。あるいは、「社会で生きる力を身につけさせる」といった観点で、**②訓練志向**や**③実用志向**を重視する先生も多いでしょう。

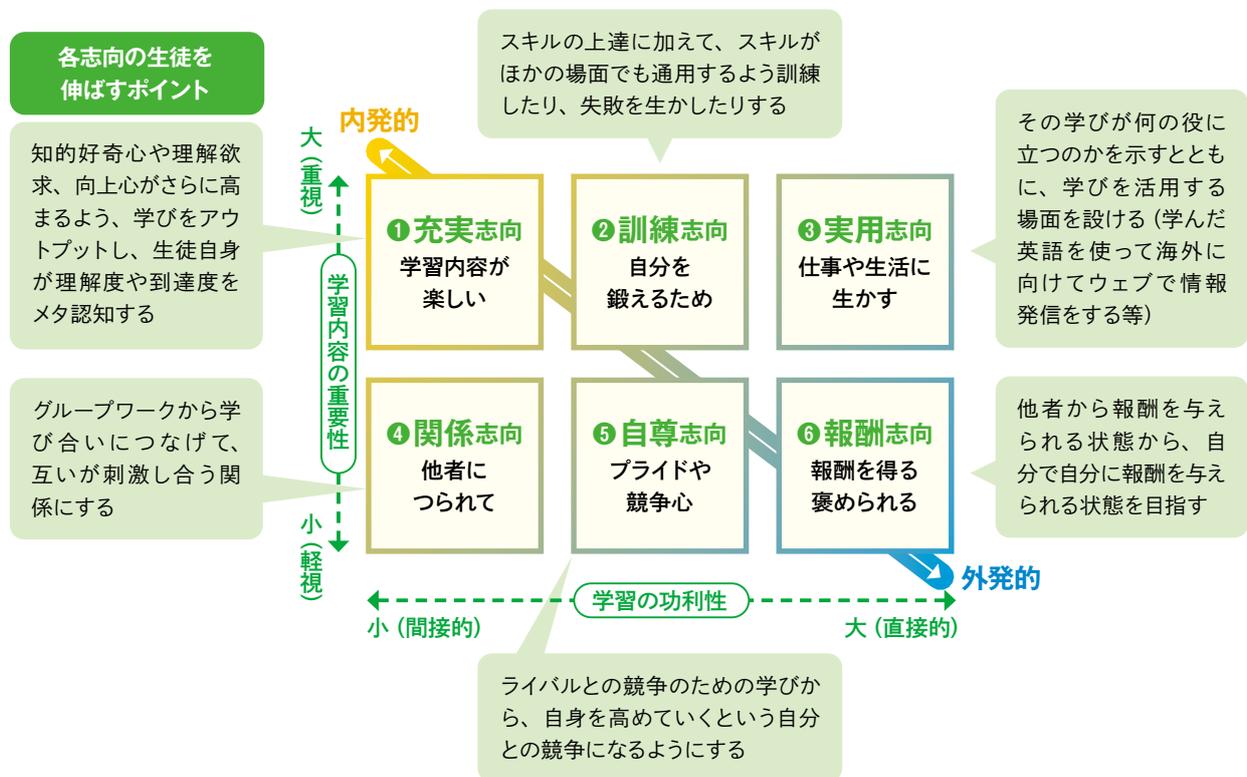
しかし、生徒がすべての教科・科目の学習内容に学ぶ意味を見いだすことは難しく、「テストに出るから覚えて

おくこと」などと、**⑥報酬志向**で学習意欲を上げようとすることもあるかもしれません。「内容分離動機」は、先生方にはあまり好まれないかもしれませんが、学習が苦手な子どもが学びに向かう入り口としては有効だと考えています。

例えば、友人と一緒にだとやる気が出るといった**④関係志向**や、少々幼いころかもしれませんが、シールをたくさん貼ってもらうために頑張る**⑥報酬志向**でも、学習動機として有効なケースがあります。そして、それらが最初の学習動機であっても、学習の過程で成り功体験を積み重ねることによって学習内容の面白さや実用性を認識し、「内容関与動機」に移行することがあります。「内容分離動機」を学習の入り口として、そこにとどまることなく、「内容関与動機」につなげる仕かけが大切です。

学習動機は生徒それぞれに異なります。同じ志向を持っていても生徒によって強弱があるでしょうし、1人の生徒の中に複数の志向があるはずで、そこで、6つの志向をそれぞれ刺激する活動を行うとともに、生徒の志向性に合った活動に重点を置いたカリキュラムにするとよいでしょう。図1には6つの志向の生徒を伸ばすポイントを例示したので、参考にしてみてください。

図1 「学習動機の2要因モデル」 学習意欲に影響する6つの志向と、各志向の生徒を伸ばすポイント



※市川名誉教授の提供資料と取材を基に編集部で作成。

3校の実践に見る動機づけのポイント

6つの志向を刺激しつつ、生徒の気質に応じて重点化

事例1～3の各校の実践が、6つの志向のどれにつながっているのかを見ていきます(図2)。

事例1の宮城県岩ヶ崎高校は、地元商店街との連携や地域コーディネーターの支援によって**4関係志向**を生み出し、探究学習の楽しさややりがいを感じ、**1充実志向**も高めています。地域の依頼に応じた課題に取り組むことは、**3実用志向**につながります。

ICTツールの書式を利用した活動記録は、「空欄を埋めたい」という欲求を引き出している点で**6報酬志向**と言えます。空欄を埋めるための学習の過程では、学びの面白さを知り、**1充実志向**への転換が期待できます。**6報酬志向**を入力口に「内容関与動機」へと発展させる戦略的な取り組みだと思えます。

事例2の茨城県立並木中等教育学校が行う「課題探究」は、自分が心底追究したいテーマを考へる過程で学習そのものの面白さを感じさせる**1充実志向**の取り組みです。そして、「課題探究」の成果を生かしたコンテストなどへの参加は、自分の力を試すのであれば**5自尊志向**であり、結果はどつであれ、**自尊志向**であり、結果はどつであれ、

挑戦する過程が楽しいのであれば**1充実志向**になります。また、企業訪問や研究者の講演など、本物に触れる経験は**3実用志向**を喚起させます。

教科学習や探究学習における異学年合同の活動は、**4関係志向**をうまく引き出しています。教わる側の下級生はもちろん、教える側の上級生にとっても学びの理解が深まるので、双方にとって**1充実志向**につながります。

それらと同様の効果を上げているのが、事例3の徳島県立小松島高校の生徒授業です。**4関係志向**から始めた学びが、**1充実志向**になっていく様子が見られました。他者が理解できるように伝える学びは、社会で必要な力身につける**3実用志向**の面もあります。

「学習マラソン」は、クラスで協力したいという思いを引き出す**4関係志向**の活動で、実際に貢献できたことに誇りを感じる**5自尊志向**につながっています。加えて、「松高・未来のための手帳」で自分の成長や課題をメタ認知する機会が日々あることが、**1充実志向**に結びついていました。

3校とも、6つの志向それぞれを刺激しつつ、生徒の志向の特徴に応じた活動に重点を置いたカリキュラムとし、より多くの生徒に学習の動機づけを図っていました。

図2 3校の実践と6つの志向の関係(各校の記事で取り上げた活動を分類)

	事例1 宮城県岩ヶ崎高校 (P.4-7)	事例2 茨城県立並木中等教育学校 (P.8-11)	事例3 徳島県立小松島高校 (P.12-15)
<b>1 充実志向</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アクションプラン(知らなかったことを知る、自分で学びを深める)</li> <li>岩高探究ツアー(地域を深く知ることが楽しい)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>課題探究(1年間かけて探究テーマを設定)</li> <li>異学年合同のゼミ活動、TO学習(他者に教えるために自分が深く理解する)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒授業(他者に教えるために自分が深く理解する)</li> <li>松高・未来のための手帳(自分の努力をメタ認知し、達成感を得る)</li> </ul>
<b>2 訓練志向</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ICTを活用した活動記録(蓄積した記録を振り返り、成長を実感する)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>課題探究(研究に必要なデータを自分で収集する)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>松高ルーブリック(次に目指す状態を明確に持てる)</li> </ul>
<b>3 実用志向</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Iwagasaki Jimoto大学、アクションプラン(地域の課題や状況を知る)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SSH講座、SSHサイエンスカフェ(本物の研究や実社会に触れる)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒授業(他者が理解できる説明をする)</li> </ul>
<b>4 関係志向</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アクションプラン(地域課題に取り組む)</li> <li>岩高探究ツアー(気仙沼市で同市の中高生の語り部の話を聞く)</li> <li>地域コーディネーターの配置(地域の役に立ちたい)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>異学年合同のゼミ活動、TO学習(後輩に教えられるように頑張る、優れた研究・指導を行う上級生に憧れる)</li> <li>カッター研修(仲間と一緒に頑張ることができた)</li> <li>ライトホール(仲間が頑張っているから自分も頑張る)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒授業(友人に教えられるよう、頑張る)</li> <li>学習マラソン(クラスで協力したい、仲間が頑張っているから自分も頑張る)</li> </ul>
<b>5 自尊志向</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>コンテストなどへの参加(競い合って自分の力を試したい)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習マラソン(クラスに貢献できたことに誇りを感じる)</li> </ul>
<b>6 報酬志向</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ICTを活用した活動記録(自分の活動を一覧化すると、未記入の項目が気になり、埋めたくなる)</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>手帳コンクール(教師に認められる)</li> </ul>

注) 各校の活動は、複数の志向にまたがっているケースがある。 ※市川名誉教授の取材を基に編集部で作成。

## 学習意欲の向上

— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする

学習意欲を高めるための視点

### 「習得」と「探究」の往還で、 学習意欲を刺激する

3校の事例では探究学習の実践が多く取り上げられており、探究学習の意義が高校現場に浸透してきたことを実感しました。だからこそ生徒の学習意欲を高める上で着目してほしいのが、「習得」と「探究」のバランスです。基礎・基本の知識を身につける「習得」と、自分で設定したテーマを追究する「探究」は、どちらも等しく重要な学びであり、学習指導要領では「習得・活用・探究」の学習プロセスが示されています。

「習得」と「探究」は別々に存在する学びではありません。「習得」で身につけた知識・技能を生かして「探究」するとともに、「探究」を通じて自分の足りない知識・技能を自覚することが、「習得」の動機づけになるといった関係があります(図3)。例えば、探究の成果を海外の高校生に発信する活動を行い、相手にうまく伝えられなければ、英単語や文法などの必要性を痛感し、英語の授業に一生懸命取り組むようになります。その結果、海外の高校生とスムーズにやり取りができるようになります。授業への意欲がさらに高まります。ところが、生徒は自分で学びを深め

る「探究」には意欲的でも、知識・技能の「習得」への意欲が乏しいといった課題をしばしば耳にします。そこで、「習得」においても楽しく学び、成長を実感できる「教えて考えさせる授業」を紹介します。

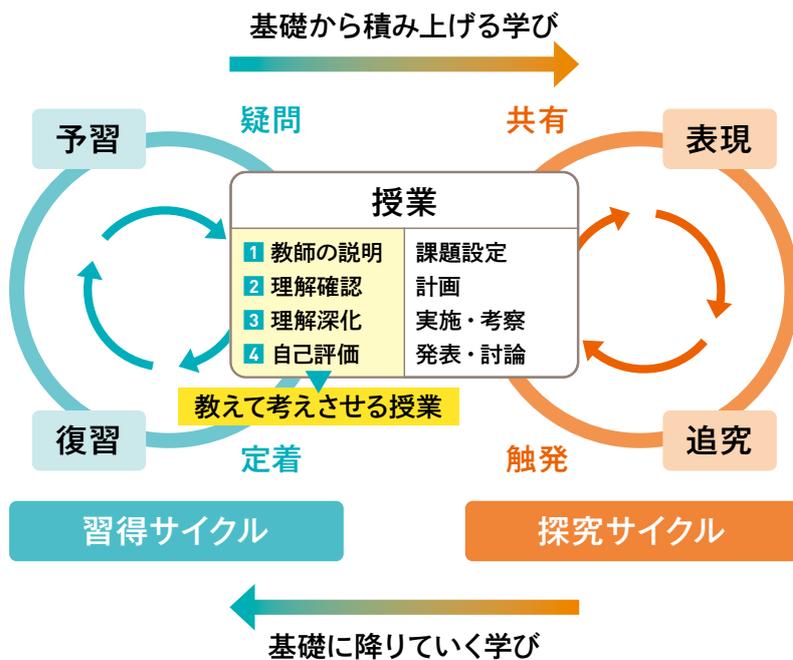
授業の流れは、**1 教師の説明**、**2 理解確認**、**3 理解深化**、**4 自己評価**となります(図3)。そこで重要なのは、**2 理解確認**です。人は一度説明を聞いたからといって、その内容をきちんと理解するとは限りません。**1 教師の説明**後、理解した内容を隣同士で伝え合うなど、生徒がアウトプットし、学習内容の**2 理解確認**をする場を設けてみてください。そうして基本的な知識を共有してから、**3 理解深化**で高い問題解決を行うのです。インプットしたことを自分の言葉で説明する、考えを出し合っで協働で問題を解決する、自分の理解度を**4 自己評価**し、学び方の改善につなげるといったサイクルを「習得」の授業で行えば、基礎から積み上がる学びとして探究学習にも生きてきます。

探究学習が日常的に行われるようになった今こそ、教科・科目間のつながりや、「習得」と「探究」の往還を意識したカリキュラムを、学校全体で議論していただきたいと思います。

図3 「習得」と「探究」のサイクルの関係

### 教えて考えさせる 「習得」の授業の進め方

- 1 教師の説明**  
一斉授業で教師が知識を説明する。
- 2 理解確認**  
教師が説明した内容について、生徒同士で口頭で説明し合い、互いに理解できているかどうかを確認する。生徒は後輩に教えるような気持ちで伝える。教師はその様子を見て、生徒の理解が不十分な場合、改めて説明する。
- 3 理解深化**  
知識を活用して解く問題を提示。生徒は協働して取り組む。知識を理解していることは確認済みであるため、学習が得意な生徒と苦手な生徒と一緒に考えることができる。
- 4 自己評価**  
授業で「分かったこと」「分からなかったこと」「さらに調べたいこと」などを書く。自分の学びをメタ認知することは、次の学びへの意欲につながる。



※市川名誉教授の提供資料と取材を基に編集部で作成。